

第 32 話 2011 年 5 月 7 日（土）

IT 企業のホスピタリティと自己破産③

IT 企業のホスピタリティ戦略（林田正光、ダイヤモンド社）を読む。

この本の題材になった ISFnet（アイエスエフネット）は、1963 年生まれの渡邊幸義氏が率いる IT 企業である。渡邊氏は IT 企業を経て 2000 年に同社を設立し、10 年間で 1,800 名の ISFnet グループに育てた新鋭の経営者である。3 月 11 日の大震災以来、電力不足が懸念されるなか、5 月からのクールビズをいち早く導入し、テレビでも報道されていた企業である。

林田氏は、ホスピタリティに関する著書を既に 20 数冊も書かれていて、氏が勤務したリッツカールトン大阪のホスピタリティを題材にしたベストセラーが有名である。

この本の内容は、ISFnet のホスピタリティ社内研修にクレド作成が含まれていることに興味を惹かれた。クレドについては、2006 年に前職のコンサルティング会社でお世話になったジョンソン・エンド・ジョンソン（J&J）のクレドを思い出す。この J&J のクレドは、私の本棚の大事な資料として今も保管されている。

また、ホスピタリティ力を磨く（ホスピタリティ力の極意）として、ホスピタリティ力を持てるか持てないかの差は「気づく」か気づかないかの差であり、その気づきについて以下のような柳生家の家訓を紹介している。

- ・小才は縁に逢って縁に気づかず
- ・中才は縁に気づいて縁を活かさず
- ・大才は袖振り合う他生の縁もこれを活かす

柳生家といえば、柳生新陰流を編み出した剣豪の一族であるが、人と人との「縁」をモチーフに剣の道を究める術を説いたのではなかろうか。

話題を変えよう。

この見聞録で 2001 年～2002 年にかけて、数回にわたり自己破産と自助努力について考えてきたが、この 4 月末に富山へ帰省した際、老齡の父が認知症と診断されたこともあり、79 歳になった母が自己破産を希望したため、検討することになった。この 10 年間、頑張ってきた両親の努力には頭が下がる思いである。そうなる前に何とかするものだ！と口で言うのは簡単なことだが、年齡という壁の重さにはなかなか対抗できないものである。

つづく

